中世前期の宴曲譜本
――「十二曲本」『早歌抜書』を中心に――
（付、冷泉家時雨亭文庫蔵『早歌抜書』翻刻）

神田裕子

一、はじめに

宴曲は鎌倉時代に成立した歌謡であり、音楽的、修辞的に能楽に影響を与えたことで知られる。古くは世阿弥自筆本〈江口〉に宴曲の影響を認められ、世阿弥自筆本〈柏崎〉にも歌謡としての「早歌」に言及がある。世阿弥自筆本〈江口〉（応永三十一年九月廿日の識語）には、

上サウカフシ
アキノミツ　ミナキリヲチテ　サルフネノ　月モカケサス
サヲノウタ…

とあり、これは宴曲のうち「真曲抄」所収の〈対揚〉の

秋の水漲来（みつみなぎりきたって）は　舟さること速なり

などからの影響を想定できる。世阿弥自筆本〈柏崎〉にも

アライトウシヤ　このヒタ、レノヌシワ　ワカツマナカラ　ユ
ミワ三モノトヤランヲ　イソロエ　ウタレンカ　サウカ　コウ
タモシヤウスニテ…

とある。この他、世阿弥の芸談聞書『申楽談儀』にも宴曲の音程に関する言及がある。世阿弥以後、金春禅竹、禅鳳も自身の伝書において宴曲について記述している。[1] 最近では能楽師の家から宴曲譜本の発見が相次いだ。[2] 室町期の能楽の地拍子が宴曲の地拍子の影響を受けていたことも近年の研究で判明した。[3] 能楽に影響を与えた先行芸能として、宴曲は看過できないものであるという事実は広く認識されつつある。

宴曲研究は一九七〇年代～一九九〇年代に基礎が確立され、その恩恵を現在の我々は受けている。だが、その後三十年以上が経過し、冷泉家時雨亭文庫蔵の室町期（応永前後）の宴曲譜本二十数本が学界に紹介されたことを筆頭とし、数々の江戸時代以前の宴曲譜本が発見された。それらの新資料を過去の研究成果と照合することが現在の宴曲研究の課題である。微力ながら本稿もその一端を担うものとなろう。

こうした現状があり、外村南都子氏所蔵「十二曲本」ならびに冷泉家時雨亭文庫蔵『早歌抜書』の考察を通じて、中世前期の宴曲譜本がどのようなものであったか、論証していくことを本稿の目的とする。

「十二曲本」について最初に大きく取り上げたのは小沢正夫・安田孝子「宴曲十二集」である。[4] 小沢氏は、石田元季氏旧蔵（愛知県立大学現蔵）の石田氏臨写本[5]を解説、翻刻している。小沢氏は「十二曲本」に〈寝寤恋〉（「玉林苑下」所収）が含まれることを根拠として、「十二曲本」の成立時期を「玉林苑のできた文保三年（一三一九）前後であったろう」と推測している。また現在までのところ、「十二曲本」の書写本は石田氏臨写本以外は確認されておらず、「十二曲本」の内容およびその臨写本の存在を報告した点においてこれは有意義な成果であったといえる。

その後、外村久江氏も「十二曲本」を論考の中で取り上げ、「十二曲本」の文字表記と曲頭記の特徴に着目し、「十二曲本」を「古体を伝えたもの」と位置づけた。外村久江氏も論考執筆時点では石田臨写本によって考察しており、「原本は相当に古い形式を備えたもののようである」としている。[6] なお、外村久江氏は『鎌倉文化の研究』[7]の中でも「十二曲本」について言及しているが、それは「森川氏所蔵の十二曲集」としている。

石田元季氏以後、「十二曲本」の原本調査を初めて行ったのは蒲生美津子氏である。蒲生氏は、「十二曲本」の原本を所蔵していた森川勘一郎氏に連絡を取り（著書あとがきによると、蒲生氏は当時の一誠堂書店二代目社長の酒井宇吉氏に森川氏の連絡先を教えてもらったという）、原本を調査した。そして蒲生氏ご著書の出版に先立ち、「十二曲本」の写真撮影を希望したが、その時には森川勘一郎氏は他界し、森川氏次男の森川勇氏が「十二曲本」を所有していた。それを撮影して再調査を行ったとのことである。蒲生氏は「十二曲本」のカラー口絵写真三葉を著書に掲載した上で、「十二曲本」の音楽表記に着目し、詳細な報告を行った。[8]

外村久江・外村南都子両氏『早歌全詞集』[9]において「故森川勘一郎蔵　十二曲集」は本文の校訂に用いられ、伊藤正義氏編『冷泉家時雨亭叢書　宴曲上』[10]にも言及されているが、その後、「十二曲本」は大きく取り上げられることはなかった。

二〇〇一年頃、一誠堂書店三代目社長の酒井健彦氏から「宴曲の本があるから見てみますか」と仰っていただき、筆者は拝見した。それが、筆者と「十二曲本」原本との最初の出会いだった。森川勘一郎氏旧蔵「十二曲本」が一誠堂書店にたどり着いていたことには驚いたが、これまでの経緯を顧みればさほど驚くべきことでもないかもしれない。そして「十二曲本」は二〇〇三年九月の一誠堂書店創業百周年記念、古典籍善本展示即売会に出品され、その目録『一誠堂書店創業百周年記念　古転籍善本展示即売会目録』に三枚の写真が掲載された。「十二曲本」は同時に出品された応永二年坂阿署名本『宴曲集巻第四』と共に外村南都子氏の所蔵となり、現在に至る。購入されて間もない頃に、外村南都子氏から全丁のデジタル写真データを筆者は賜った。これまで数回に渡って原本も閲覧させていただいている。そうしたいきさつもあり、本稿において「十二曲本」の考察をさせていただくことを外村南都子氏からお許しいただ

いた。

「十二曲本」については最近佐々木孝浩氏が原本の書誌調査を行い、新たな見解が提示された[11]。

〔十二曲本〕粘葉装（紙釘装）〔南北朝室町初〕写　一帖

共紙表紙（二一・八×一五・四糎、表裏共に手油や後人の落書きで汚れている、表表紙の表には本来本文があったと覚しいが、現在は擦れて全く確認できない）。

外題は表紙中央に後人の墨書で「哥意本」とあり（両脇に大きく「天地玄」「天地玄黄」などとある落書きと同筆カ）。内題なし。

料紙厚手の楮紙。

遊紙なし。半葉五行、押界あり（高一八・八、幅二・八糎）。

墨付三五丁。

奥書・印記なし。

本文漢字平仮名混じり。朱曲頭記・左墨片仮名ルビ（かなり少ない）・朱合点・朱墨譜あり。本文は表紙裏より「匂あり梢に春の」（拾菓集下「梅花」、前五行分を欠く、表紙部分にあったはず）で始まり、（中略）一二曲を納める。各所の曲名下の余白にも手習いの落書きがある。鼠嚙や汚損により一部本文の欠落もある。

調査範囲の中では最も古いもののように思われるし、サイズが他に比べて目立って小さい。特殊なのは装訂もであり、粘葉装のように仕立てながらも糊付けはせず、紙釘装にして綴じてある。この様な装訂は、他に國學院大學蔵の『平家物語』「屋代本」がある。（中略）粘葉装（のような装訂）で押界があるという性格は、三千院本と共通しており、本書も寺院での書写や僧侶が関与した可能性が高そうである。

とし、書写年代を〔南北朝期室町初〕と比定した。佐々木氏の精細な調査に基づくこの見解は重要である。この書誌学的立場からの佐々木氏の見解が、はたして宴曲研究の視点からの調査と一致するものであるか、本稿において曲目編成、本文、音楽的記号などを調査することによって検証する。

中世前期の宴曲譜本について考えるにあたり本稿では、冷泉家時雨亭文庫蔵『早歌抜書』も併せて調査する必要があると判断した。『早歌抜書』は伊藤正義編『冷泉家時雨亭叢書　宴曲下』[12]において初めてその存在が知られたものである（詳細は付録参照）。

外村南都子氏は『早歌抜書』について、その曲目編成が和歌集の部立にあてはまること、草仮名表記の多さを指摘し、一曲全体からの抜粋の手法、修辞的な出典など、詳細に考察している[13]。これらの研究成果に基づきつつ、本稿では主として「十二曲本」と『早歌抜書』を比較し、音楽的記号の特色なども合わせて、検討する。

二、曲目編成について

最近発見された新曲三曲〈四季恋〉〈鶯〉〈枕〉を除けば[14]、鎌倉時代末期に明空によって撰集された宴曲の伝本は八部十六冊の撰集（一六一曲）と外物一冊（一二曲）の譜本のかたちで伝わった。一冊に十曲前後の宴曲を収録し、編成される収録曲ならびに曲順に異

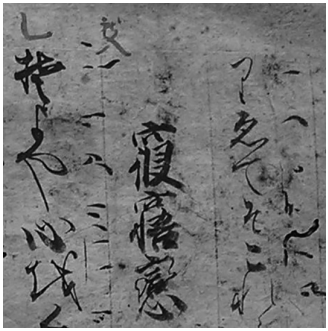
同はない。中世の宴曲譜本のうち、十曲前後の宴曲を収録する冊子で曲目に異同があるものは、「十二曲本」、冷泉家時雨亭文庫蔵『早歌抜書』、阪本龍門文庫蔵永享八年口阿奥書『宴曲抜華』[15]の三点である。

まずは「十二曲本」の曲目編成を記す。

〈曲目〉　〈原典〉
梅花　「拾菓集下」（嘉元四年〈一三〇六〉頃成立）
花　「宴曲集巻第一」（永仁四年〈一二九六〉頃成立）
夏　「宴曲集巻第一」
郭公　「宴曲集巻第一」
納涼　「究百集」（正安三年〈一三〇一〉頃成立）
秋　「宴曲集巻第一」
月　「宴曲集巻第一」
秋興　「宴曲集巻第一」
冬　「宴曲集巻第一」
雪　「宴曲集巻第一」
心　「宴曲集巻第五」（永仁四年頃成立）
寝寤恋　「玉林苑下」（文保三年〈一三一九〉頃成立）

このように、永仁四年頃から文保三年頃までに作られた宴曲の歌集から抜粋して集めたものである。〈梅花〉〈花〉は春、〈夏〉〈郭公〉〈納涼〉は夏、〈秋〉〈月〉〈秋興〉は秋、〈冬〉〈雪〉は冬の情景を謡っており、春夏秋冬の四季の順に配列されている。そして忠義や仏心を謡った〈心〉は雑、〈寝寤恋〉は恋、となる。

「十二曲本」の最後に収録された〈寝寤恋〉の冒頭には「新入」の朱書が施されており、これについては先行研究で取り上げられている。「十二曲本」の臨写本を調査した小沢正夫氏は、和歌集の部立では、四季、恋、雑の配列順になるのが本来であるから、構成としては〈寝寤恋〉は〈心〉の前に来るべきであるが、「新入」の朱書があることを根拠として、後から「十二曲本」に付け加えられたために順序が前後してしまったのではないかと推測している。実際に「十二曲本」の原本で確認すると、〈心〉の詞章末尾から一行改行して〈寝寤恋〉の内題を書き、改行して本文を書いており、同じ頁に続けて書いている。〈梅花〉から〈心〉までと〈寝寤恋〉は同筆であり、筆勢なども特に違いはない（書誌調査を行った佐々木孝浩氏もこの件については特に言及していない）。小沢氏の推測とは



【図版1／「十二曲本」のうち〈寝寤恋〉冒頭】

異なり、「十二曲本」の原本の前の十一曲と〈寝寤恋〉との書写に長い時間の隔たりはないと考えられ、〈寝寤恋〉が後から追加されたために〈心〉の後に配列されてしまったのであろうという小沢氏の推測は当てはまらないと考えられる。

小沢氏の見解に対し、外村久江氏は〈寝寤恋〉冒頭の「新入」の朱書について、架蔵（現在は国文学研究資料館所蔵）の『玉林苑下』の〈寝寤恋〉にも「新入」の朱書があることを根拠とし、原本の「新入」の文字をそのまま書き込んで移したものであろうと推測し、「十二曲本」に〈寝寤恋〉を新たに入れたという意味ではないのではないかとしている。また、外村久江氏のこの説をふまえた上で、落合博志氏は〈寝寤恋〉が「『玉林苑』下の中でも最後に収録されたものであろうか。」と推定している。[16]

『玉林苑下』の〈寝寤恋〉に「新入」の朱書がなされた時期は、『玉林苑下』の成立した文保三年〈一三一九〉頃からさほど遠くないと考えられ、「十二曲本」の成立年代を推定する上での手がかりの一つと見なしうるであろう。

参考までに、江戸時代以前書写の『玉林苑下』の写本は、外村久江氏旧蔵本の他に、冷泉家時雨亭文庫蔵応永元年〈一三九四〉八月廿二日坂阿奥書本があるが、この坂阿奥書本『玉林苑下』の〈寝寤恋〉の冒頭には、「新入」の朱書はない。

「十二曲本」の曲目編成を考えるにあたり、参照すべきものとして、冷泉家時雨亭文庫蔵『早歌抜書』が挙げられる。『早歌抜書』の曲目編成は、以下の通りである。

〈曲目〉	〈原典〉	
春	「宴曲集巻第一」	
☆花	「宴曲集巻第一」	
☆夏	「宴曲集巻第一」	
☆納涼	「究百集」	
☆秋	「宴曲集巻第一」	
☆月	「宴曲集巻第一」	
☆冬	「宴曲集巻第一」	
☆雪	「宴曲集巻第一」	
祝言	「宴曲集巻第二」	
不老不死	「宴曲集巻第二」	
忍恋	「拾菓集上」	
袖湊	「宴曲集巻第三」	
金谷思	「拾菓集上」	
船	「宴曲抄下」	
磯城島	「拾菓集下」※	前の十二曲とは明らかに別筆の増補。一曲全体の詞章を書き、末尾の一部に施譜。
蹴鞠	「拾菓集下」※	右の〈磯城島〉と同筆の増補。抜粋された詞章が書かれ、全文に施譜。

増補の〈磯城島〉〈蹴鞠〉を除けば、『早歌抜書』に収録された十四曲のうち、☆を付した七曲〈花〉～〈雪〉は「十二曲本」と重複

している。重複しない残り七曲の抄出元も「宴曲抄下」の〈船〉以外は同じである。『早歌抜書』は一曲全体ではなく、断片的な詞章を収録するものであるが、曲目の編成という点に着目すると、四季・賀・恋・雑という順序で配列されており、和歌の部立が意識されている。[17] 和歌の部立を意識した曲目編成がなされているという点において、「十二曲本」と『早歌抜書』は共通しているのである。

参考までに、永享八年〈一四三六〉口阿奥書『宴曲抜華』の曲目編成も挙げておく。

〈曲目〉	〈原典〉
☆秋	「宴曲集巻第一」
年中	「宴曲集巻第五」
☆心	「宴曲集巻第五」
君臣	「究百集」
滝山等覚誉	「拾菓集上」
遊仙	「拾菓集下」
車	「拾菓集下」
文字	「拾菓抄」
諏方	「拾菓抄」

〈秋〉〈心〉の二曲、そして収録曲の原典が「十二曲本」『早歌抜書』と重なるものの、和歌の部立は特に意識されていないことは明白である。繰り返しになるが、明空が撰集した宴曲譜本の現存するものは八部十六冊のかたちで伝わり、十曲前後を収録する冊子は収録曲にも曲順にも異同がない。異同があるものは右の三冊のみで、そのうちの二冊、「十二曲本」と『早歌抜書』は和歌集の部立を意識して編成されているという点で一致しているのである。

三、文字表記について

鎌倉時代書写の宴曲断簡などの古い宴曲資料は草仮名で記載されることが多い。それは外村久江氏の論考以来の通説であり、外村久江氏は「十二曲本」と三千院円融蔵本、京都大学国語国文学研究室本、大東急記念文庫本、西本願寺旧蔵本転写本、神宮文庫本ほか、続群書類従系統の「宴曲集巻第一」を比較し、「十二曲本」の草仮名表記の多さを指摘している。[18] 外村久江氏は「宴曲集巻第一」所収曲〈秋〉を事例として掲げ、本文中の漢字の数ならびに比率を図示している。「十二曲本」と「宴曲集巻第一」十本を比較した結果、「十二曲本」の〈秋〉の中の漢字数は二十九字と最も少ないという事実が判明した。

冷泉家時雨亭文庫蔵『早歌抜書』の漢字の数について、外村南都子氏は具体的数値を提示していないが、『早歌抜書』には漢字表記が少なく、草仮名表記がきわめて多いことに言及している。「十二曲本」と『早歌抜書』になぜ草仮名表記が多用されているのか、今あらためて顧みると、その理由は、宴曲が和歌の文化を意識していることに起因するのではないかと筆者は考えている。前項において、「十二曲本」と『早歌抜書』の曲目編成が和歌の部立を意識していることを指摘したが、文字表記の仕方についても和歌を意識し

て草仮名を多用した可能性がある。

草仮名の多用は和歌の美意識を再現するという表面上の利点のみならず、歌謡としての宴曲譜本の正確さを向上させるという実際的な利点もあったと考えられる。拙著において既に指摘しているが、宴曲という歌謡は、表記上の差異があったとしても耳で聞いた時には諸本間の異同がほぼないということが大きな特徴である。[1] 本文が漢字で表記された場合には音の異同が生じる可能性が高くなり、草仮名（平仮名）で記載された方が音の異同は生じにくくなる。「山」と表記すれば読み方は「やま」「サン」の二通りであるが、「やま」と表記すれば音に異同は生じないというわけである。外村久江氏は「節をつける上からは仮名書きが便利であったろう」と推測している。能の謡本と同じで、宴曲も一つの音に対して一つのゴマ点が付されることを考慮すると、たしかに節付は草仮名の方が簡単であろう。

本稿において、「十二曲本」と『早歌抜書』の二点の文字表記を比較した。結論から言うと、「十二曲本」と『早歌抜書』は、表記の面においても共通して草仮名表記が多い。

まず、『究百集』所収曲〈納涼〉の事例を挙げる。『究百集』は坂阿奥書本も現存しており、比較が可能であった。以下に引用した文は『早歌抜書』の本文と、「十二曲本」、冷泉家時雨亭文庫蔵明徳三年〈一三九二〉坂阿奥書『究百集』[19] の抜粋を並記したものである。

〈納涼〉

【抜書】冷　しき梢のしけの井山の井玉の井玉　河　川　なみよす

【十二】す、しき梢のしけのひ山の井玉の井たまかはかは波　よす

【坂阿】□　き梢の滋　野井山の井玉の井玉　河　々　浪　寄

【抜書】る渚　の院　平等院につり殿

【十二】るなきさの院　平等院につりとの

【坂阿】る渚　の院　平等院に釣　殿

この〈納涼〉の事例では、草仮名表記が最も多いのは「十二曲本」で『早歌抜書』は「十二曲本」よりやや漢字が多く、坂阿奥書本は漢字表記がさらに多い。

次に、「十二曲本」、『早歌抜書』、金春宗家蔵本『宴曲集巻第一』の三点を比較する。現在、坂阿の奥書を有する『宴曲集巻第一』は確認されておらず、坂阿本の代わりに坂阿節付本である可能性の高い金春宗家蔵本[20] を比較するのが妥当であると判断した。この三本に共通する曲目は、〈花〉〈夏〉〈秋〉〈月〉〈冬〉〈雪〉の六曲である。このうち〈秋〉を除く五曲を掲げる。

〈花〉

【抜書】花見の御幸ときこえしは保安第五の二月万代のためしをは

【十二】花見の御幸ときこえしは保安第五の二月万代のためしをは

【金春】花見の御幸と聞　えしは保安第五の二月万代の様　をば

【抜書】花にそとめし　白　川かめにさしたる花を見て物おもひ

【十二】花にそとめし　しら川かめにさしたる花をみて物おもひ

【金春】花にぞとめし　白　河瓶　に差　たる花を見て物思

【抜書】なしや老の春
【十二】なしや老のはる
【金春】なしや老の春

〈夏〉

【抜書】そともの木かけ露すゝし一村過　る夕たちに水まさらさら
【十二】そともの木かけ露すゝし一村すくる夕立　に水まさらさら
【金春】外　面の木陰　露すゞし一村過　る夕立　に水まさらざら

【抜書】めや鵜飼　舟　蛍やかゝり篝火や蛍　にまかふ夕暗
【十二】めやうかひ舟　蛍やかゝり篝火やほたるにまかふ夕やみ
【金春】めや鵜飼　舟　蛍や篝　篝火や蛍　に紛　夕闇

〈月〉

【抜書】いさ見にゆかんさらしなやをは捨　山きよ見か関ひろさは
【十二】いさ見にゆかんさらしなやおはすて山清　見か関ひろさは
【金春】去来見に行　ん佐良科　や姨　捨　山清　見が関広　沢

【抜書】すみのえなには　かた蘆　間にやとる夜はの月
【十二】すみの江難　波　潟　あしまにやとる夜半の月
【金春】住　の江難　波　潟　葦　間に宿　る夜半の月

〈冬〉

【抜書】板　井の水もみくさゐてこほりの上に霰ふり小野の山里雪
【十二】いたいの水もみくさいて氷　の上に霰ふり小野の山里雪
【金春】板　井の水も水草　居て氷　の上に霰ふり小野の山里雪

【抜書】ふかし跡　たに　見えぬ細道
【十二】深　あとたに　見えぬ細道
【金春】深　し跡　だに　見えぬ細道

〈雪〉

【抜書】ふりくる雪ゆきの光　にあくる山の尾上　の里　のさと
【十二】ふりくる雪ゆきのひかりにあくる山のをのへのさとの里
【金春】降　来る雪雪　の光　に明　る山の尾上　の里　の里

【抜書】人は人目かれゆく　跡　なき庭にとはぬをなさけと思　へと
【十二】人は人目かれゆく　あとなき庭にとはぬをなさけとおもへと
【金春】人は人目□　行　跡　なき庭にとはぬを情　とおもへと

【抜書】も猶　うらめしくやまたるらむ
【十二】もなをうらめしくやまたるらん
【金春】もなをうらめしくや待　るらむ

「十二曲本」『早歌抜書』金春宗家蔵『宴曲集巻第一』の三本を比較しても、やはり金春本は最も漢字表記が多く、「十二曲本」と

『早歌抜書』は草仮名表記が多いことが分かる。

〈秋〉は、永享八年〈一四三六〉口阿奥書『宴曲抜華』（龍門文庫蔵）にも収録されており、計四本の比較が可能である。

〈秋〉

【抜書】秋風　ふけは七夕のつまむかへふねにちきりてやときしも
【十二】秋風　ふけは七夕の妻　むかへふねにちきりてや時　しも
【金春】秋風　吹　ば七夕の妻　迎　船　に契　てや時　しも
【口阿】秋かせ吹　は七夕の妻　迎　船　に契　てや時　しも

【抜書】声を帆にあけて　雲井をわたる鴈かね
【十二】声をほにあけて　雲ゐをわたる鴈かね
【金春】声を顕　揚　て　雲居を渡　る鴈金
【口阿】声をほにあけて　雲居をわたる鴈かね

この事例でも金春本と『宴曲抜華』の漢字表記の多さは明白である。また、「十二曲本」と『宴曲集巻第一』〈秋〉の漢字の数については外村久江氏の調査[18]があり、「十二曲本」の漢字の数が最も少ないという事実が判明しているが、そこに右の並記比較の結果をを付加すると、

『早歌抜書』	漢字の数	9
「十二曲本」	漢字の数	9
金春本『宴曲集巻第一』	漢字の数	18
『宴曲抜華』	漢字の数	13

となる。数値を掲げるのは〈秋〉のみとするが、〈花〉〈夏〉〈月〉〈冬〉〈雪〉の並記比較を試みれば、同様の結果になることは明かである。

引用が多くなったが、「十二曲本」と『早歌抜書』が草仮名表記を多用し、漢字表記が少ないという点においても共通しているということを検証できた。これはおそらく、「十二曲本」と『早歌抜書』の二本が曲目編成のみならず表記の面でも和歌の文化を意識した結果であろうと、筆者は推定する。また、漢字表記よりも草仮名表記の方が音の差異が生じにくくなる、節付がしやすくなるなどの利便性にも起因するものであろう。

四、音楽的記号について

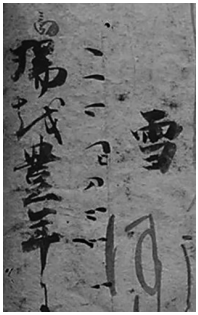
宴曲譜本にはさまざまな音楽的記号が付されている。「十二曲本」と『早歌抜書』のそれぞれについて調査を行った。

(i) 曲頭記について

曲頭記とは、音階を示す朱書きの記号で、曲の冒頭に甲・乙・地のいずれかを記す。蒲生氏先行研究において指摘されていることであるが、「十二曲本」は曲頭記に《地》を記載せず開始音（五音の宮・商・角・徴・羽のうち、〈秋〉に徴、〈雪〉に商）を記載する。

横道萬里雄氏は、「《地》が早歌の源流である」とされ[21]、外村久江氏は「はじめは曲頭にわざわざ《地》という表記をいれなくても良

【図版2／十二曲本〈秋〉冒頭】



【図版3／十二曲本〈雪〉冒頭】

かったのではないかと考えられる」とされ、[22] 両氏は《地》の曲頭記を記載しないかたちが古式であるとした。現存する宴曲譜本のうち、このかたちのものは、「十二曲本」と円徳寺蔵応永三年坂阿奥書『真曲抄』の二本のみである。『早歌抜書』は曲全体から一部を抜粋して書かれたものであるため、曲頭記は記載されていない。応永三年坂阿奥書の『真曲抄』のうちの〈法華〉が地を記さずに徴を記すことは異例であるが、先行研究で指摘されている通り、曲頭記に徴・商を有する「十二曲本」は古態を有すると見なしうるであろう。

(ii) 垂れ鍵について

垂れ鍵とは、音階になんらかの変化を与えたと考えられる記号で、右下がりの垂れ鍵（へ）と左下がりの垂れ鍵の二種類がある。筆者は「十二曲本」『早歌抜書』と坂阿節付本および他の室町期書写の宴曲譜本を比較調査した。その結果、以下の四箇所の異同を確認できた。[23]

① 〈納涼〉の「玉順山の碧岸悟真寺の瑶池…」の箇所、「十二曲本」には右下がりの垂れ鍵（へ）があるが、坂阿本ならびに尊経閣本の『究百集』にはない。坂阿本と尊経閣本では「玉順[羽]山」となっており、「羽」の朱譜があるのみ。

② 〈冬〉の「間無時雨の間無時雨の布留の神」の箇所、「十二曲本」には垂れ鍵がないが、金春本を含め、室町期書写の「宴曲集巻第一」譜本には有る。

③ 〈雪〉の「梅が枝に花ふりまかふ」の箇所、金春本には垂れ鍵がないが、「十二曲本」のほか、室町期書写の「宴曲集巻第一」譜本には有る。

④ 〈心〉の「壁に収めし箱の底…」の箇所、「十二曲本」には垂れ鍵がないが、無署名本「宴曲集巻第五」、龍門文庫『宴曲抜華』には有る。

これら四つの異同が音楽的な差異を意味するか、あるいは単なる誤脱であるか、判断することは難しい。ここで指摘しておきたいのは①についてである。

【図版4／十二曲本〈納涼〉】

【図版5／尊経閣文庫『究百集』〈納涼〉】

垂れ鍵はなんらかの音階の変化を表す記号であるが、具体的な謡い方を指示する記号としては漠然としている。それに対し、坂阿本と尊経閣本では「玉順羽山」となっており、この方が謡う人間にとっては明瞭であると考えられる。現在の能の謡の記号は、文の一文字に記号が付くことで、その一文字の音を指定したり、アクセントを付けたり、音を高くする、低くするといった具体的な謡い方を意味する。坂阿本と尊経閣本の「玉順羽山」という表記は、「じゅ」の文字で羽の音に下げることを意味すると推測できる。したがって、この異同は時代的変化によるものと推測され、そのような場合は具体的な記号の方が後代のかたちであると考えられる。

なお、冷泉家『早歌抜書』には右の〈納涼〉の当該箇所そのものがないため比較できない。また『早歌抜書』の垂れ鍵は三箇所〈春〉〈月〉〈忍恋〉それぞれにあるのみである。〈春〉〈月〉は「十二曲本」と比較、〈忍恋〉は冷泉家坂阿本と比較したが、いずれも一致している。

(iii) 墨譜について

墨譜とは墨書きの音楽的記号で、宮商徴角羽の五音、音階を示す上下、ゴマ点を含むハカセなどさまざまである。この中で注意すべき異同は二つある。

① 「―下」の注記の異同。
② 「入ス」と「下」の表記の異同。

まず、①の異同についてであるが、「十二曲本」は七五調の下半句の句末二字分に「―下」の注記がある。蒲生氏によると、「―下」がもっとも古いかたちで、「―下」に「商」を並記するものが次の段階、その次の段階では「商」のみとする。蒲生氏も「商」という具体的な音階を示す記号があるかたちを後代のものと考えているのである。

【図版6[24]】

①

…(23)森川本　(3)頼秋本

②

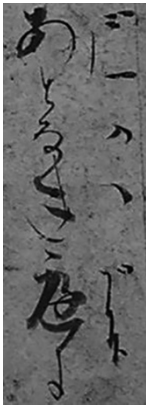
…(3)頼秋本　(7)円徳本　(31)国会本

③

…その他の譜本

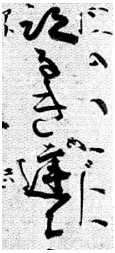
蒲生氏著書刊行の時点で発見されていなかった『早歌抜書』の当該箇所がどのようになっているか、ここで確認する。〈雪〉の二曲から抜粋し、参考までに「十二曲本」と「金春本」の当該箇所も挙げる。〈雪〉のうち、「あとなき庭に」の墨譜である。

【図版7／十二曲本〈雪〉】



【図版8／『早歌抜書』〈雪〉】

【図版9／金春本〈雪〉】



「十二曲本」は【図版6】の蒲生氏分類の通り①のかたちであり、金春本も蒲生氏分類の③に該当する「商」の記載がある。『早歌抜書』の当該箇所は「└┘」のみで「下」も「商」も記載がなく、蒲生氏分類にはないかたちである。ただし、「商」がないという点では「十二曲本」と一致しており、蒲生氏分類の①と②の中間的な位置づけのものと考えることができる。[25] つまり、「十二曲本」のかたちが最も古く、過渡的様相を呈するものが『早歌抜書』、そしてさらに後代には「商」を記載する金春本のかたちになっているといえる。

次に、②「入ス」と「下」の表記の異同についてであるが、下半句の旋律型を表す記号として、「十二曲本」は「入ス」を用いるが「抜書」は「下」の表記を用いる。〈冬〉の本文のうち、「細道」の部分を挙げる。

【図版10／十二曲本】

【図版11／早歌抜書】

蒲生氏によると、坂阿の奥書を有するものでもこの記号にはばらつきがあるという。円徳寺蔵応永三年坂阿奥書『真曲抄』では「入ス」、京都歴彩館蔵応永二年坂阿奥書『宴曲抄上』では「下」が用いられているという。「入ス」と「下」の表記の違いは必ずしも時代的変化によるものとは言えず、どのような音楽的差異を意味するか、不明である。ただ、この事例も、「細道」の「ほ」の発音の際に下の音に下がるということを意味すると仮定すれば、やはりこれも『早歌抜書』の「下」の表記の方が後代のかたちと考えることができる。

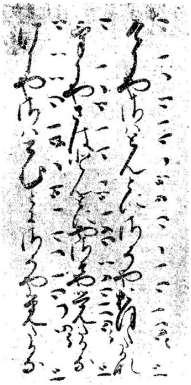
（iv）拍子点について

宴曲は扇で拍子を取りながら謡われていたことで知られている。拍子点は、扇を打つタイミングを示す記号である。「十二曲本」の拍子点が他の宴曲譜本と大きく異なることを、蒲生美津子氏は既に指摘しており、これはきわめて重要な事項であるため、ここに再掲する。「十二曲本」の全十二曲（約百二箇所程度）において、「・・・∴」という拍子点パターンの最後の拍子点「∴」が、ゴマ

点の下方ではなく上方に記されている。これは、前項の〈冬〉の「細道」の【図版10】で確認できるため、再度【図版10】を参照していただきたい。「道」の右横が「十二曲本」の方は「‥ー」であるが、『早歌抜書』は【図版11】で「ー‥」となっている。この濁点のような「‥」が拍子点で、この位置が異なるのである。

ゴマ点の下方に拍子点が点じられるのが原則通りであり、【図版11】で分かるように『早歌抜書』は他の宴曲譜本と同じである。現在確認されている宴曲譜本の中で、上方に拍子点「‥」が付されるものは「十二曲本」以外では、金沢文庫蔵〈衣〉断簡と竹柏園文庫旧蔵（天理大学図書館現蔵）『撰要目録巻』所収〈げにやさば〉のみである。

【図版12／金沢文庫〈衣〉のうち、「おみの袖」[26]



【図版13／竹柏園『撰要目録巻』のうち〈げにやさば〉三行の行末】[27]

【図版12】の金沢文庫〈衣〉の「おみの袖」の右に付された拍子点および【図版13】の竹柏園文庫旧蔵『撰要目録巻』所収〈げにやさば〉の三行の行末全てが、「‥ー」となっており、「十二曲本」と同じかたちである。金沢文庫蔵〈衣〉は宮商角徴羽の五音の記載がないもので、鎌倉期の譜本であると認識されているものである。[28]〈げにやさば〉は『撰要両曲巻』冒頭および『撰要目録巻』末尾の「撰要一体三名秘訣并当道三説二説両曲口伝事」に記載される宴曲の謡い物で、『渓嵐拾葉集』にもその存在が言及されている。[29]『渓嵐拾葉集』は文保二年〈一三一八〉頃から貞和四年〈一三四八〉年頃にかけて作成されたものであるから、[30]〈げにやさば〉の謡い物もその頃には流布していたと言える。こうした宴曲の最古の史料にある拍子点の特徴と、「十二曲本」の拍子点が一致するのである。

この拍子点の特徴に関しては既に蒲生氏が指摘している通りであり、ゴマ点の上方に拍子点が付されるかたちが古態である。

蒲生氏以来のこの定説に本稿で付け加えることは、『早歌抜書』と「十二曲本」は和歌を意識した曲目編成であることや草仮名表記の多さなどの共通点が有るが、音楽的記号について調査した結果、『早歌抜書』は「十二曲本」と同列には扱えないということである。『早歌抜書』は、多くの江戸期以前の宴曲譜本と同様にゴマ点の下方に拍子点が付されており（【図版11】参照）、これは後のかたちである。

五、終わりに

以上、外村南都子氏蔵「十二曲本」を中心に、冷泉家時雨亭文庫蔵『早歌抜書』との比較も交えて、曲目編成、文字表記、音楽的記号を考察した。その結果言えることは「十二曲本」と『早歌抜書』の両書が古態を有する宴曲譜本であるということである。曲目編成が明空が撰集した八部十六冊のかたちと異なり、和歌集の部立を意識して編成されているという点、草仮名表記を多用している点、七五調の下半句の句末二字分に「商」の記載がないという三つの点で、「十二曲本」と『早歌抜書』は共通している。この特徴は一部の例外〈京都大学蔵頼秋本の一部も七五調の下半句の句末二字分に「商」の記載がない〉を除き、応永頃に活躍した坂阿による宴曲譜本にはないものである。したがって、この二冊は、応永前後の坂阿本よりも古態を有し、中世前期の宴曲譜本であると言える。

「十二曲本」の〈寝寤恋〉の冒頭には、「新入」の朱書があり、このことは「十二曲本」の編纂時期が『玉林苑下』の成立した文保三年〈一三一九〉頃からさほど遠くない時期である可能性を示唆するかもしれない。応永元年〈一三九四〉坂阿奥書の『玉林苑下』の〈寝寤恋〉には「新入」の記載がないこともその推測の根拠となるであろう。また、先行研究で指摘されているが、「十二曲本」には「地」の曲頭記がなく、代わりに開始音を記載していること、七五調の下半句の句末二字分に「――下」の注記があること、拍子点パターンの最後の拍子点がハカセの下方ではなく上方に記されていることなどの音楽的記号の特徴は、「十二曲本」の古態性を十分に証明するものである。特に、拍子点については、同じかたちを持つものが鎌倉時代書写の金沢文庫〈衣〉と竹柏園『撰要目録巻』の〈げにやさば〉のみであるため、「十二曲本」の書かれた時期は鎌倉時代末期か、南北朝期の早い時期（一三三〇年代頃）ではないかと筆者は考える。「十二曲本」の持つこうした音楽的記号の特徴が、一つの例外（円徳寺蔵応永三年坂阿奥書『真曲抄』は「地」の曲頭記に代わって開始音を記している）を除いて明徳応永期の坂阿本等に見られないことも、その想定を裏付ける。

音楽的記号の特徴から冷泉家時雨亭文庫蔵『早歌抜書』は「十二曲本」よりも後の成立のものであると推定されるが、『早歌抜書』も古態を有する宴曲譜本である。伊藤正義氏は『早歌抜書』の書写年代を「鎌倉時代後期」とし、補記には「早歌本としては最古本に属する」として、南北朝期頃に装丁を変えて〈磯城島〉〈蹴鞠〉の二曲を書き継いだと推量したが、この見解は本稿の調査結果とも一致するものである。「十二曲本」同様、『早歌抜書』もその特徴から、明徳応永期まで下る譜本である可能性は低いと考える。

本稿ではわずか二冊の本についての考察を試みたが、今後さらに調査すれば、中世前期の宴曲譜本の在り様をさらに解明できると確信する。

註

1　世阿弥自筆本の引用は表章・月曜会編『世阿弥自筆能本集　校訂編』岩波書店、一九九七年、宴曲本文の引用は外村久江・外村南都子『早歌全詞集』三弥井書店、一九九三年による。また世阿

弥自筆本〈江口〉と世阿弥自筆本〈柏崎〉の用例、『申楽談儀』の宴曲についての記述、禅竹、禅鳳の伝書における宴曲についての記述は全て拙著『能と古注釈書』（笠間書院、二〇一〇年）のうち「第三章　能の芸能的基盤―宴曲の世界」参照。

2　具体的事例としては、金春流宗家宅から『宴曲集巻第一』が発見され（拙著『能と古注釈書』のうち第三章第二節「金春宗家蔵『宴曲集巻第一』をめぐって」参照。）、大阪能楽会館に所蔵されていた観世流能楽師の大西家所蔵資料の中から室町期譜本の『拾菓抄』が発見された（岡田三津子・関屋俊彦「資料紹介と翻刻　大西家所蔵　宴曲『拾菓抄』」（『大阪工業大学紀要』第六三巻一号、二〇一八年九月所収）。また、京観世五軒家のうちの岩井七郎左衛門家四代目当主直恒による宴曲譜本の収集と書写に関する報告もある（岡田三津子「岩井直恒の宴曲『拾菓集』書写」（『大阪工業大学紀要』第五八巻二号、二〇一三年九月）所収）。

3　高桑いづみ「地拍子の古態―早歌からの継承」（『能と狂言』一四号、二〇一六年九月所収）。

4　『愛知県立大学　説林』七、一九六〇年十二月、所収。

5　石田氏臨写本は現在愛知県立大学の所蔵となっており、全丁の写真は国文学研究資料館のマイクロフィルムにおいて確認することができる。305-53-15。

6　外村久江『早歌の研究』（至文堂、一九六五年）のうち、三〇二頁、「第八章　早歌十六冊本の伝本研究」。

7　三弥井書店、一九九六年。

8　蒲生美津子『早歌の音楽的研究』三省堂、一九八三年。

9　三弥井書店、一九九三年。

10　朝日新聞社、一九九六年。

11　佐々木孝浩「宴曲古写本書誌一覧」（岡田三津子編『早歌の継承と伝流』三弥井書店、二〇一七年）に所収。

12　朝日新聞社、一九九七年。

13　外村南都子「冷泉家本『早歌抜書』の研究―早歌の部分謡集として―」、（外村南都子『早歌の心情と表現』三弥井書店、二〇〇五年、所収）。

14　岡田三津子編『早歌の継承と伝流』三弥井書店、二〇一七年、所収。

15　川瀬一馬『龍門文庫善本叢刊第九巻』勉誠社、一九八七年、所収。

16　国文学研究資料館編『国文学研究資料館影印叢書3　中世歌謡資料集』汲古書院、二〇〇五年、所収。

17　外村南都子「冷泉家蔵本『早歌抜書』の研究―早歌の部分謡集として―」（『早歌の心情と表現』三弥井書店、二〇〇五年、所収。

18　「宴曲集巻第一にみられる傾向」（『早歌の研究』至文堂、一九六五年）

19　伊藤正義編『宴曲集　下』朝日新聞社、一九九七年。

20　拙著「金春宗家蔵『宴曲集巻第一』影印・翻刻・解題」（『能と古注釈書』笠間書院、二〇一〇年）のほか、岡田三津子、関屋俊彦「資料紹介と翻刻　大西家所蔵　宴曲「拾菓抄」」（『大阪工業大学研究紀要』六三巻一号、二〇一八年九月）でも考証されており、金春宗家蔵本は、奥書が抹消されているが、坂阿節付本と見

なしてよかろう。

21 「早歌の新旧」（横道萬里雄『能劇の研究』岩波書店、一九八六年、所収）。

22 外村久江『早歌の研究』至文堂、一九六五年。

23 筆者はかつて金春本『宴曲集巻第一』と他の室町期写本（冷泉家無署名本、三千院本、大東急本、頼秋本）を校合して調査を行ったが、垂れ鍵に関しては諸本ほぼ一致しており、金春本が一箇所（本文に掲げた③〈雪〉の事例）のみ欠落していた。「十二曲本」には四箇所の異同があり、これは留意すべきことである。

24 蒲生氏著書二二一頁の図版を転載した。

25 なお、蒲生氏調査によると、京都大学蔵頼秋本は「――下」の表記と「――下（商）」の表記を併用するというが、『早歌抜書』の当該箇所は全て「商」はなく、「――」のみである。

26 乾克己『金沢文庫資料全書七　歌謡・声明篇』金沢文庫、一九八四年、所収。

27 蒲生氏著書二〇四頁の図版を転載した。

28 外村久江『早歌の研究』四〇六頁。

29 伊藤正義『宴曲下』のうち「解題」四～五頁。

30 田中貴子『『渓嵐拾葉集』の世界』、名古屋大学出版会、二〇〇三年。

【付記】本稿において資料の画像掲載ならびに翻刻をご許可いただきました冷泉家時雨亭文庫ならびに金春安明先生、外村南都子先生に心より感謝申し上げる次第である。

【付、冷泉家時雨亭文庫蔵『早歌抜書』翻刻】

［解題］以下、伊藤正義編『宴曲集　下』（朝日新聞社、一九九七年）に掲載された伊藤氏による解題を転載する。

○早歌抜書

内題　なし。

外題　早哥抜書。

書写　鎌倉時代後期。

寸法　縦二二・四センチ、横一四・四センチ

料紙　粗い楮紙打紙（表紙・本文共紙。原表紙散逸）。

装丁　綴葉装（第二括まで折紙、第三括は六枚を綴る）。

紙数　二十二丁（第一括三紙六丁、第二括二紙四丁、以上折紙。第三括六紙十二丁）。

本文　一面四行、墨譜・朱譜、施譜、無譜交り。

奥書　なし。

補記　早歌本としては最古本に属する

該本は目次に「春」以下「船」までの十四曲を掲げ、その詞章句を折紙綴葉二括分の終丁表まで記す。その丁裏の周辺三方に糊跡があることからは、包表紙を付けて完結したと思しい。後年（南北朝期頃カ）、別人が別の紙を折紙にし、折目（下小口）を切り離して両面書きができるようにして三括目として合綴、もとの二括目終了裏から、目録にない「磯城島」「蹴鞠」の二曲を書継ぎ（三括目はそのために裏うつりがある）。原表紙を付けたが、後にその表紙は散逸したと推

量される。

［翻刻凡例］伊藤正義編『宴曲集　下』（朝日新聞社、一九九七年）に従った。

一、使用文字は常用漢字を原則とし、常用漢字にない文字は正字を用いた。篇や画の違いなど、底本の曖昧な字体は、最も近い字を宛てた。

二、底本の左傍訓を右傍に移し、区切りを一字アケとした。

三、曲譜は省略した。（筆者補足）『早歌抜書』には、曲頭記・延曲・助音の記載はない。

四、ごく稀に見られるミセケチ訂正は、訂正本文に従った。

五、（筆者補足）字配りは原本通りとした。

［冷泉家時雨亭文庫蔵『早歌抜書』翻刻］

早哥抜書」（表紙）

春
夏
秋

春　花
夏　納涼
秋　月
冬　雪

祝言　不老不死」（一オ）

忍恋　袖湊
金谷思　船」（一ウ）

春

しゐてや手折ましおらてやかさゝ
ましやなやよひのなかき春日も
猶あかなくに暮しつ」（二オ）

花

花見の御幸ときこえしは保安第五
の二月万代（ヨロツヨ）のためしをは花にそとめ
し白川かめにさしたる花を見て」（二ウ）
物おもひなしや老の春

夏

そともの木かけ露すゝし一村過る
夕たちに水まさらさらめや鵜飼舟」（三オ）
蛍やかゝり篝火や蛍にまかふ夕暗

納涼

冷しき梢のしけの井山の井玉の井
玉河川なみよする渚の院平等院」（三ウ）

につり殿

秋

秋風ふけは七夕のつまむかへふねに
ちきりてやときしも声を帆にあけて」（四オ）
雲井をわたる鴈かね

月

いさ見にゆかんさらしなやをは捨山
きよ見か関ひろさはすみのえなには」（四ウ）
かた蘆間にやとる夜はの月

冬

板井の水もみくさゐてこほりの上に霰
ふり小野の山里雪ふかし跡たに見えぬ」（五オ）
細道

雪

ふりくる雪ゆきの光にあくる山の
尾上の里のさと人は人目かれゆく」（五ウ）
跡なき庭にとはぬをなさけと思へ
とも猶うらめしくやまたるらむ

祝言

蓬莱洞は長生殿歳月春秋（セイケツシュンシウ）」（六オ）
つもりても老せぬ門につかへて忠臣
あしたを待出るいさこにひゝく沓の音

不老不死

仙宮万年のもてあそひ上寿をたも」（六ウ）
つことわさなりいつもときはの若みとり
千とせを遠く松にすむはまた巣
の中なるひな鶴

忍恋」（七オ）

我またしらぬしのゝめの道芝ふかき朝
露を涙にそへて帰るさのつらさに
のこるあり明のつれなき命はなからへて
忍ふとすれと柏木のもりてきこえし」（七ウ）
夕時雨そめのこしける岩根の松の
たねをはたれかまきけむ

袖湊

ちきりの末のかはらすは虎ふす野へ」（八オ）
鯨のよるしまにもとゝめはとまりなむやな

金谷思

またむつことも尽なくに明ぬといそく
きぬ／／のいまはの山の嶺にさへたえ／／」（八ウ）
まよふよこ雲

船

とわたる舟のかいのしつくもたえかたき
三千里のすまの浦つたひ」（九オ）

磯城嶋

夫磯城嶋やまとうたかたはひの河上より
なかれきて心を難波つの浪によす或
は久方の天よりくたりあるひは八雲」（九ウ）
の風を伝三十文字あまり一も
しは人の代のことわさなれは今
も大君の御かけくもらぬもてあそひ
かしこきかなやすへらきの代々にたえ」（一〇オ）
せぬ道をしる花になく鶯はこと葉の
はやしにさえつり水に住てうかはつは
心の泉に声をそふふもとのちりひち
山となりてみねにたなひくしら雲のかゝ」（一〇ウ）
る心のしなへよりなさけをさま／／もあら
はす凡うたに六義ありまつそへうたを
初とし其品あまたにわかれつゝうね
めのたはふれこまやかに此一歌は此道」（一一オ）
のうたの誠をしらすなり色このみの
家にむもれ木の人しれぬ心をかよはし
たけきみちには物のふのかたき心を
やはらくさてもならのいにしへにひろひ」（一一ウ）
あつめしことの葉のあとをたつねし
御代かとよ百年あまりのすゑをうけて
十つきにえらひし古今集天暦はあま
ねきうたのひしり五人をなしつほに定」（一二オ）
をき花山は旧道をしたひ拾遺を三代
の後につくそれより此方代々の聖主も
これをすてられす春の朝の吉野山桜
も雲にまかひけん彼の柿の本の家の風」（一二ウ）
いつれも共にわきかたき山のへの霞の色
けにたちおとらすやきこゆらんまた
名をえたりし人は是僧正遍昭はいた
つらに絵にかける女の心をうこかす心ち」（一三オ）
してそのま事やすくなかりけんしほめる
花の色なくてうすき匂の残しは彼中
将の歌のしな文屋の康秀は商人のよ
き衣きたらん其さま身におはすやみえ」（一三ウ）
けん暁の雲にみる月のおも影かすかに
残りしも宇治山の喜撰とか小野の小
町はふるき名残りいと物哀なる女のな

やめるところありしも古のそとをりひめか」（一四オ）
りうなり大伴のくろぬしは花の陰にや
すらひて薪をおへる山人をとはの山の音に
き、てまついひ渡る中川の岩もる水の
とかこちてもかきつくしたる玉つさの心も」（一四ウ）
歌にやしらるらん目にみぬ人もこ、に通
只此道のしるへなりあらふる神もみそな
はして歌には徳をほとこすかたしけなかり
し勅判は亭子の院の歌合天徳四年は」（一五オ）
小野みや村上の御宇にえらはる康保の
秋のなかは清涼殿の月の宴色々の花を
つくしてもうたをそことにさきとせし光源氏
は物語中にもふかき心ありあすか井にしほ」（一五ウ）
りしさ衣ね覚にすくる夜半の時雨けにた
けとりのおきなさひてなを住吉のはま松の
その名かはらぬふる事もさなから歌の中
たちなり倭歌のうらや道もむかしにかへる」（一六オ）
浪のよしあし分てもしほ草かきをくあ
ともたえせす

蹴鞠

中にも顕徳院殊に此道（芸）に達し此道に」（一六ウ）
長しまし／＼て人数を六八にわかちつ、したう
つの色を六のしなに定られ精霊をしけの井に
あかめて松本の明神とかうしたてまつる――
そよや光源氏のさまことにわりなくき
こえし中にも鞠に興をす、めしはえなら」（一七オ）
ぬ花の夕はへ――
つゐにいかなるたよりにかこすゑはかほる
花ならん散も恨めしき花の枝に桜を
よきて木の間をわくる鞠はけにことはり
とそおほゆる」（一七ウ）